

クラスの男女で野球拳！男子も女子もすっぽんぽんに！？

教室内で激しく口論を繰り広げる佐藤悠斗と山本彩花。休み時間の教室で、彼らは教室中の視線を一身に浴びていた。

事の発端は些細だった。昼休み、悠斗が彩花のノートを勝手に手に取り、コピーしようとしたことから始まった。「ちょっと、勝手に触らないでよ！」彩花の鋭い声が教室に響き、悠斗はニヤリと笑って肩をすくめた。「別にいいじゃん、ケチケチすんなよ、彩花。」その軽口が彩花の堪忍袋の緒を切った。「は？あんたこそ人のものの平気でパクるような最低な奴！」彩花の声は熱を帯び、頬が怒りで赤く染まる。悠斗も負けじと反撃。「お前だって、いつもガリ勉強取って上から目線じゃん！ムカつくんだよ！」

口喧嘩はエスカレートし、クラスメイトたちが興味津々に見守る中、悠斗が突然目を輝かせ、信じられない提案を口にした。「じゃあさ、彩花、もういいよ！野球拳で決着つけようぜ！」教室が一瞬、凍りついた。彩花の顔が真っ赤になり、目を剥いて悠斗を睨みつけた。「は！？ふざけないでよ！頭おかしいんじゃない！？」彼女の声は震え、羞恥と怒りが混じった表情で悠斗をにらみつけた。クラスメイトたちは「え、マジ！？」「野球拳！？」「やるの！？」と騒ぎ出し、教室は一気に祭りのような雰囲気包まれた。

「ほら、根性なしじゃん！やっぱり口だけかよ！」悠斗の挑発に、彩花の顔がさらに赤く染まる。彼女は唇を噛み、拳を握りしめ、ついに叫んだ。「あんたこそ根性なしでしょ！いいわよ、やってやる！後悔すんなよ、悠斗！」彩花の声は震えていたが、負けられないという意地が彼女を突き動かし

ていた。クラスメイトたちは一斉に歓声を上げ、男子たちが「うおー！ 始まるぞ！」と囃し立て、女子たちはクスクス笑いながらも好奇心に目を輝かせた。

ルールは明確だった。制服を着た状態から始め、じゃんけんで負けた方が一枚ずつ服を脱ぐ。最後まで残った方が勝ち。誰もが冗談半分で始まったこの勝負がどこまで本気なのか、半信半疑で見守っていた。

「じゃん、けん、ぽん！」悠斗の声が教室に響き、彩花がグー、悠斗がチョキ。彩花の勝利だ。「ほら、悠斗、脱げよ！」彩花が勝ち誇ったように笑う。悠斗は肩をすくめ、「チッ、最初くらい負けてやるよ」と強がりながら、紺色のブレザーのボタンを外した。ボタンが一つ一つ外れるたび、クラスメイトの視線が彼に集中する。ブレザーが肩から滑り落ち、床にくしゃりと落ちると、白いワイシャツが現れた。ワイシャツの袖口が少し擦り切れ、首元には汗のシミがうっすら見

える。男子たちが「うおー、始まった！」と騒ぎ、女子たちは「悠斗、意外と細いね」と囁き合った。悠斗は内心、クラス中の視線に晒されることにドキドキしていたが、表面上は余裕の笑みを浮かべていた。「次はお前だぞ、彩花」と軽口を叩き、彼女を睨みつけた。

次の勝負。「じゃん、けん、ぽん！」今度は彩花がチョキ、悠斗がグー。悠斗の勝利だ。「はい、彩花、脱ぎな！」悠斗の声に、彩花の顔が一瞬強張る。彼女は唇を噛み、羞恥心で震えながらブレザーのボタンに手をかけた。細い指が震えながらボタンを一つ一つ外す。ブレザーが肩から滑り落ち、白いブラウスが現れる。ブラウスの下で、彼女の華奢な体がほのかに透け、胸の膨らみがくっきりと浮かんでいた。「まだまだ全然大丈夫よ！」彩花は叫んだが、声は震え、顔は真っ赤。彼女の心臓はバクバクと鳴り、視線に晒される恥ずかしさに体が熱く

なるのを感じていた。「彩花、頑張れよ！」
と男子の一人が囃し立て、彩花は「うるさい！」と睨みつけた。